

崔 恩瑛 (チェ ウンヨン)

韓国出身

上智大学 文学部文学研究科新聞学専攻 修士課程

繋がり

去年の9月、日本での生活が10年になりました。10年前に留学を決めたときにはこんなに長くなるとは思いませんでした。今は日本の生活に慣れてしまい、韓国には「行く」、日本には「戻る」と言うほどです。日本に来て最も驚いたことは2つあります。



1 つめは、自分の生まれた土地、北間島 (中国延辺) との繋がりです。自分が生まれたのは上の地図 (HP『Wikipedia』「延辺朝鮮族自治州」より引用) の赤い地域です。オレンジ色の吉林省の東側に位置し、北朝鮮・中国・ロシアの三国接境地域です。少なくとも私が中国で学校に通っていた当時は、教科書には延辺についての言及が少なく、延辺の形成—なぜ朝鮮族が中国の地に多いのか—などの「自分自身」について理解する機会が少なかったのですが、逆に日本では間島とは何で東アジアではどのような立ち位置にいるのかが世界で最も研究され

るのが日本であることもいくつかの学会によって確認できました。これは「自分自身」を知り、理解することになり、とても感謝したいことでした。

2 つめは、自分の研究との繋がりです。私の研究は日本の新聞で脱北者がどう扱われているかを中心に、脱北者問題が日朝関係に与える影響を考えることです。日本に在住する脱北者は210人あまり、韓国には3万人以上と推計され、一見、日本とは大した関係がないように見えますが、日本との関係は韓国よりも大きい影響があると現時点では考えています。

その理由は1950年代から1984年にかけての帰国事業です。まず1950年代を考えると、日本は戦争特需により経済が急激に成長する時でもあり、世界各国との交流も頻繁で、1948年の世界人権宣言を受け人権意識が台頭し始めた時期でもあります。帰国事業で帰った人たちにとって、この時期に日本で教育を受け見てきたことと、北朝鮮の様子との違いは大きなショックでもあったと思います。終戦直後の韓国のGDPはアフリカのガーナより低かったことがよくニュースで取上げられますが、当時の北朝鮮も、当時の韓国と大して変わらないと推測します。

その帰国者たちはもとより、周りの北朝鮮国民までもが「外」——日本への憧れを根強く持つようになり、これが次世代の脱北者増加問題に繋がっているのではないかと考えています。

正直なところ、韓国や中国にいた時、日本と脱北者との繋がりによく見えませんでした。研究を進めるほど思いもしなかった繋がりが見えることにやりがいを感じています。このように「位置」を変えてみれば見える風景も変わり、日本と中国、日本と韓国、韓国と中国の間の矛盾もよりよい解決方法が見えるのではないかと考えています。

以上